

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	竹田 彩夏	指導教員 (主査)	高橋 稔

論文題目	一 次 性 ・ 二 次 性 サ イ コ パ シ ー 傾 向 を 有 す る 者 の 意 思 決 定 ス タ イ ル の 特 徴 — 生 理 的 指 標 を 用 い た 検 討 —
------	----------------------------------------------------------------------------------------------

本文概要

【問題提起】サイコパスとは冷淡、良心の呵責の欠如、衝動性、表面的な魅力などを特徴とするパーソナリティ特性である。サイコパス傾向の高い者は多種多様なリスク行動に従事することが知られているが、サイコパスは犯罪や非行に特有の概念ではなく、健常者と連続的であると指摘されており、むしろ社会に適応し大きな成功を収める「成功したサイコパス」の存在も報告されている。リスク行動との関連が見られる一方で適応的な側面も見られる一件矛盾したサイコパスの二面性の背景には、一次性サイコパスと二次性サイコパスの特性の違いがあると考えられる。一次性サイコパスは冷淡、利己的などの情緒的特性との関連が強く、社会的に有利な変数との関連が見られる。一方、二次性サイコパスは、衝動性や不安などとの関連が強く、不合理なリスク行動との関連が指摘されている (Benning et al., 2005; Falkenbach et al., 2007)。一次性、二次性サイコパスにおける違いを説明する為に、心理行動的な傾向の他に生理的な反応が手がかりになると考えられる。意思決定課題において不利なリスク選択をし続ける脳損傷患者は、通常リスク選択の前に生じる生理的な反応が喚起されず、それが原因でリスク選択を避けられないと考えられている (Damasio, 1994)。同様に不利な状況でのリスク選択と関連がある二次性サイコパスの背景には、この生理反応の障害がある可能性が考えられる。しかし一次性、二次性サイコパスにおける意思決定の違いを生理的指標を用いて検討した研究は無い。本研究では、心理行動的な傾向に加え意思決定課題中の生理的反応を検討する事で、サイコパスの不合理なリスク選択の背景にある要因を検討した。【方法】大学生、大学院生55名が研究に参加した。日本語版一次性・二次性サイコパス尺度 (Levenson et al., 1995 ; 杉浦・佐藤, 2005) を用いてサイコパス傾向を測定し、その得点を元に、参加者を一次性サイコパス群 (一次性サイコパスのみが高い群)、二次性サイコパス群 (二次性サイコパスが高い群)、非サイコパス群 (一次性、二次性サイコパスいずれも低い群) に分類した。意思決定課題としてコンピューター版アイオワギャンブリング課題を実施し、心理行動的特性として衝動性、時間展望、リスクテイキング行動を質問紙にて測定した。課題中の生理的反応の指標として皮膚コンダクタンス反応 (SCR) を用いた。【結果と考察】課題成績と課題中の不利選択回数について、それぞれを従属変数、群を独立変数とした一元配置の分散分析を行ったが、いずれも有意な差は見られなかった。先行研究では、サイコパスは非サイコパスと比較するとリスクのある選択を避けられず、ギャンブル課題の成績が悪くなるという結果や、ギャンブル課題における不利選択は、一次性サイコパスではなく二次性サイコパスと関連するという結果が得られていたが、本研究はこうした過去の知見と一致しない結果となった。課題中のSCRについては、群とカードの種類 (有利・不利) を独立変数、SCRを従属変数とした、二元配置分散分析を行った。その結果、全てのSCRについて、カード種類の主効果のみが見られ、サイコパス傾向の程度に関わらず、ローリスクローリターン の有利カードを引く前および後よりも、ハイリスクハイリターンのデッキを引く前および後の方がSCRが大きくなることが示され、仮説は支持されなかった。一方、心理、行動的特性については、衝動性、現在快楽傾向などにおいて二次性サイコパス群が非サイコパス群よりも高いという先行研究どおりの結果が得られた。心理、行動的側面については、アナログ研究でも対象にできる“準サイコパス”でも検討できるが、意思決定や生理的側面については“真のサイコパス”を対象とする必要性が示唆された。